



TITLE:

## 価値の類型と個性(三・完)

AUTHOR(S):

恒藤, 恭

---

CITATION:

恒藤, 恭. 価値の類型と個性(三・完). 経済論叢 1923, 16(6): 940-958

ISSUE DATE:

1923-06-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128035>

RIGHT:

# 會學濟經學大國帝都京 叢論濟經

號六第 卷六十第

行發日一月六年二十正大

## 論叢

賣上税の本質及長所

法學博士 神戸 正雄

日本經濟史の特性

法學士 本庄 榮治郎

サン・シ  
モン派の社會改造哲學及び連帶思想

文學博士 米田 庄太郎

價値の類型と個性

法學士 恒 藤 恭

## 時論

支那の産業に對する投資

法學博士 戸田 海市

税法の新改正を論ず

法學博士 小川 郷太郎

## 說苑

婚姻年齡の統計的研究

經濟學士 岡崎 文規

## 雜錄

東京市の水面人口及所帶

法學博士 財部 靜治

炭鑛労働者の生計狀態

法學博士 河田 嗣郎

## 附錄

本誌第十六卷總目錄

.....

## 價値の類型と個性 (三・完)

恒 藤 恭

- 目次——一 緒言 二 ソクラテスの價値思想 三 プラトーンの價値思想 四 カントの價値思想 五 續き、六 續き(以上前々號所載) 七 プラトーンの價値思想とカントの其れとの比較 八 リッカードの歴史思想 九 ラスクの價値思想 十 續き(以上前號所載) 十一 ラスクによける實在の世界と價値の世界との構造平行性の主張 十二 純粹價値と顯在價値 十三 價値の認識 十四 價値の個性の成立條件 十五 價値類型及び價値見本の對立と價値典型及び價値個性の對立(以上本號所載)

### 十一

ラスクの價値思想について、特に注目を要するのは、彼が、『價値共通性としては、價値は、理論的價値、倫理的價値、美的價値などの種別を有するに反し、價値一回性の形態における價値は、終極においては、理論的、倫理的、美的等の、個々の類型的價値に對し、何等かの目的論的關係に立たしめらるべきものであるにもせよ、これらの形式的價値に見られるやうな、種別的特定性を超越する』と、説いてゐる點である。即ち、ラスクの見解からすれば、價値共通性又は普遍的價値と、價値個性又は個性的價値との對立は、種別的に特定せる價値、即ち理論的、倫理的

美的等の價值の世界以外の他の世界において初めて、見出されるところの對立である。言ひ換へると、價值個性の世界が、全體として、理論的、倫理的、美的等の價值の世界に對立するものと思惟されてゐるわけである。私は、斯かるラスクの見解を、その儘承認し得ないと考へるものであつて、價值共通性と價值個性との對立を、種別的無規定性の彼岸から、種別的被規定性の世界に置換することによつて、價值の世界の構造をより明確ならしめたいと、思ふのである。

ラスクが、實在の世界の構造との對照によつて、價值の世界の構造を理解しやうとしてゐる事は、前に述べた所である。すなはちラスクに従へば、價值共通性の世界は自然的實在の世界と類似した構造を有つて居り、價值個性の世界は、歴史的實在の世界と類似した構造を有つて居る、あだかも自然の世界においては、その頂點に、最も普遍的なる自然その者の概念が立ち、その下方には、相對的に普遍的なる自然法則の概念が立ち、最底層には、特殊なる自然現象の概念が立つのに對應して、價值共通性の世界においては、その頂點に、最も普遍的なる價值その者の概念が立ち、その下方には、相對的に普遍的なる種別的價值の概念が、すなはち理論的、倫理的、美的等の概念が立ち、最底層には、それらの種別的價值の概念の單なる見本たる意義をもつにすぎないところの、個體的價值の概念が立つものと、考へられるわけである。そして、最も普遍的なる價值其者の概念及び相對的に普遍的なる各個の種別的價值の概念の本質及び意義を明かにする

ならば、是れに由つて、それらの概念の下に包攝されるところの一切の個別的價値の本質及び意義は、剩す所なく、完全に把握され能ふ筈である。この場合に、個々の特殊的價値が、相互に區別され合ふ所以のもの、及び普遍的價値から區別される所以のものを、具有することは、勿論であるけれど、斯かる區別の根據たる所のものは、個々の特殊的價値が、價値として具有する性質のうちに存するものではなくて、單に、それ等の價値の支盤たるところの實在的要素の特性のうちに存すると、思惟されるのである。之に反して、價値個性として觀られた場合における價値は價値共通性としての價値と同様に、原本的實在を支盤として實現されるものではあるけれど、價値個性が、各自獨特の意義をもつのは、それが飽くまでも價値たる性質において具有するところの個性的具象的内容に因るのであつて、價値共通性の場合のやうに、その支盤たる實在的要素の特殊の構造に基くのではない。價値個性は、各自かやうな個性的具象的内容を拉しつゝ、相互に關聯して、統一的有機的全體の組成に参加するのであり、斯くして建設される體系系列において、各個の價値個性は、唯一回しか、その實現の機會を有せず、その唯一回の機會において、各個の價値個性の意味は、それぞれ充分に發揮され、展開されるのである。しかも、かうした價値個性の不反覆性は、歴史的實在における事件が、時間の流れの裡に、唯一度現れて、その歴史的要素として因果的使命を果すのとは、意味を異にし、それ自身絶倫的な統一の意味を顯現

するところの、具象的全體的價值個性の構成要素を、一個の連續的系列のうちに置き並べた場合に、抜き差しのならぬ孰れかの一項を成すものたることを、意味するものに他ならない。單なる個別的價值と價值共通性が、恒に相互に他との論理的關係を指示し合ふやうに、價值個性は必ずや、或は部分的價值として、全體的價值個性との論理的關係を指示し、或は全體的價值として、部分的價值個性との其れを指示するのである。

## 十二

文化科學の考察方法としての理論的價值關係方法は、それ自身普遍化的概念構成方法とも、個性化的概念構成方法とも、結合し能ふものであると、私は考へるのであるが、この後の結合においては、考察の對象の關係せしめられる所の價值は、普遍的價值たるべきではなく、個性的價值たらねばならぬと思ふ。而して、理論的價值關係方法の所産たる、文化實在の世界が、宗教、科學、道德、法律、藝術、經濟などの、個々の特殊的文化實在の世界に別たれつゝ成立するのは、對象の關係せしめられる價值に、宗教價值、科學價值、道德價值、法律價值、藝術價值、經濟價值などの種別を存するからに他ならぬ。然らば、宗教史、科學史、道德史、法律史、藝術史、經濟史などの、個々の歴史的文化實在が、個性化的價值關係方法の所産として成立するのは、對象の關係せしめられる所の、各個の種別的價值が、個性的價值内容を具有するものたることを、指

1) この點については、茲に詳細に論述することを省略する。

示するものと、言ふべきである。

われわれが、あたへられた一定の感覺的實在要素を機縁として、觀照的態度をとる場合に、之を導く觀照の意味の目標如何に隨つて、觀照される價値は、必然に、さまざまの異なる種別相を呈示する、而してこの觀照の意志の目標とする所のものが、一定の先驗的要素を確實に包容して居り、これにより、あたへられた感覺的要素から擇出し來つた内容を、一定の先驗的條件に遵つて綜合する場合には、客觀の意味をそなへた價値表象が成り立つのである。之に反して、觀照的意識が、斯かる條件を具備することなくして働く場合には、單に主觀的意味をそなへた價値表象が成り立つに過ぎない。更にわれわれは、斯かる價値表象を、理會の對象とし、これに向つて價値判斷を加へることにより、客觀的意味もしくは主觀的意味をそなへた價値的概念を構成するのである。その際、價値判斷が、主觀的に妥當する主張として、定立されてゐるか、客觀的に妥當する主張として、定立されてゐるかといふことは、判斷の對象たる價値その者の妥當性が、主觀的たるか、客觀的たるかの標準を、それ自ら提示するものではないが、對象たる價値の側から見れば、主觀的妥當性を有するにすぎない價値は、斯かる價値として理會されることを要求し、客觀的妥當性を有する價値は、また斯かる性質において、理會されることを要求する。例へば、肉體的官能的欲望を満足する諸價値は、前の種類に屬するものであり、それに關しては、客觀的妥

當性を主張する判斷の形式は、最初から許され得ない。之に反して、理論的價值關係方法において目標とされるところの價值に關しては、兩様の判斷の形式が、論理的には可能であるが、この種の價值の眞正の意味は、客觀的妥當性を主張する判斷の形式によつてのみ、把握され能ふと、言はざるを得ない。

價值觀照的意識において、それを指導するところの先天的要素は、單なる價值普遍性を表明するものとしての價值の概念ではなく、謂はゞ概念以前の形象であり、一切の價值表象の成立をして可能ならしめるところの根源である。之を概念的に表白して、假りに純粹價值と呼ぶならば、純粹價值は、あらゆる個々の價值の根源として、最も普遍的なる意義を有すると同時に、最も豊富なる内容を包藏するものと言はねばならぬ。そして、斯かる源泉より、多種多様な個別的内容を汲み來りながら、感覺的要素を支盤として實現されるところの、一切の價值表象は、觀照的態度の立場においてのみ把握され能ふところの、微妙なる渾一的内容を提示しつゝ、われわれの意識に展開し來るのである。かの純粹價值に對して、斯かる價值表象によつて把握されるところの價值を、假りに顯在價值と名づけることとする。

あたへられた任意の顯在價值について、私たちは、一般に、それは價值(又は反價值)であると判斷するのみならず、觀照的意識の働きを支配するところの意志の方向如何を顧慮して、(例へ



ば)それは道德價値(又は反道德價値)であるとか、又はそれは藝術價値(又は反藝術價値)であるとかいふやうに、判斷を下す。この場合に、或は價値(又は反價値)といひ、或は道德價値(又は反道德價値)とか、藝術價値(又は反藝術價値)とかいふのは、その下に包攝さるべき一切の價値見本に共通なる標徴を把持するところの普遍的價値概念にすぎず、前に舉示した純粹價値の表象とは、全く異なるものたることは言ふまでもない。

この種の普遍的價値概念により、顯在價値の世界を考察するときは、宗教、藝術、道德、經濟法律、科學などの種々の價値種別の各個につき、それぞれ普遍的價値の世界、又は價値の類型の世界が成立する。斯かる價値の世界において、最高の普遍的價値より出發して、漸次に特殊性に富む價値の層に降つて行くとき、普遍的價値の見點からしては理會され得ない要素に逢着するけれど、それらの要素は、非價値的要素たるのであるから、價値考察の立場においては、之を不問に付しても、毫も妨げないと言われるのである。して見れば、斯かる價値の世界の本質を理會するためには、最高の普遍的價値概念を、考察の對象とすれば、足る可き筈であつて、それ以外の考察は、第一義的に問題とされることを須むないわけである。

### 十三

さきに私は、實在的存在の世界に關して『それについて論理的構造が問題とされるところの世

界は、既に何等かの程度において、思惟によつて規定された對象の世界と、思惟されなければならぬ』と言つたが、同様の事柄は、價值的對象の世界に關しても妥當すると思ふ。顯在價值その者の世界は、全然個性的なる價值内容の展開される世界であるけれど、價值の普遍性及び個性を論理的見地から問題とする場合には、思惟の規定に服し得るものとしての價值の個性が、考察の對象とされなければならぬ。だから若しも、顯在價值につき、私たちは、普遍的價值概念にみちびかれるところの價值判斷をしか、下し能はぬものであるとするならば、個性的價值の世界の論理的構造を問題とすることは、恐らく意味をなさぬ仕業たるであらう。

存在判斷と價值判斷とを比較すれば、後者は、一般にその確實性において、遙かに前者に劣るとされるのが、通常である。しかしながら、ウインデルバンドが鋭く洞察したやうに、あらゆる判斷は、根本において價值判斷であるといふ事柄の意味を、省察するならば、存在判斷にせよ、價值判斷にせよ、それが現實に行はれるものとしては、すべて真理の把握を旨とする努力において成功と失敗とのいづれかに了る可能性を有するのみならず、假令成功するとしても、その成功は、到底完全たり能はず、殆んど無限の完全性又は不完全性の階段を示すものと、言ふべきである。——顯在價值の個性的内容を把握せむとする判斷が、その普遍的内容の把握に向けられる判斷に比して、より困難であり、より小なる確實性を示すものであるとしても、既に、存在判斷

に比すればより大なる障礙を克服しなければならぬ普遍的價値判斷に對し、客觀的妥當性に向つて努力する權利が、ゆるされるならば、同様の權利が、個性的價値判斷に對して、許され得ない理由は、之を發見し能はぬであらう。この點については、自然科學的認識に對して、歴史科學的認識が立つと同様の地位を、個性的價値認識は、普遍的價値認識に對して有すると、言ふべきである。一般に、價値の認識は、存在の認識に比して、一層困難であり、確實性を缺くといふ事情の外に、判斷もしくは概念の構成要素たる言語が、價値の内容を表出するといふ目的から見て、實在的内容の場合に比べると、遙かに不便であり、不適當であるといふ事實が、個性的價値認識を阻礙することも亦、明かである。しかも、これらの困難及び障礙にも拘らず、價値の個性的内容の理論的把握は、原理的には可能であり、或る程度の成功の可能性を有するものと考へられるのである。

リスクが、價値共通性の世界に對し、價値一回性の世界を對立せしめるのも、右に述べたやうな意味において、個性的價値認識の可能性を、前提するものであると思ふが、個性的價値認識は、種別的認識の彼岸において成立するといふリスクの見解は、前述の如く、之を承認することを得ない。この點に關しては、私の知る限りでは、リスクは詳細なる論述をあたへてゐないが、假りにリスクの立場に立つて、彼の謂はゆる價値一回性の概念の内容的特性を表明するやうな名

稱的規定を加へるとすれば、價值一回性としての價值を、歴史的價值と呼び得られるであらうと思ふ。<sup>1)</sup>

價值の内容の普遍性又は個性のいづれか一方を表明するものとして、普遍的價值又は個性的價值の概念を構成するといふことは、専ら形式的に、價值を問題とする見地から、試みられる分類たる以上、斯かる分類方法に、價值の内容の種別的特定性を問題とする見地からの分類方法を、混用することは、妥當でないと思ふ。すなはち、普遍的價值と個性的價值との對立の思想は、種別的に規定された各個の客觀的價值の世界の考察においても、能く維持され得るものであり、且つ斯くすることによつて初めて、この思想の理論的意義は、一層十分に發揮され得るのである。道徳、宗教、藝術、科學、法律、經濟、教育、技術等の諸々の價值の世界において、吾々は、それぞれ價值類型と、價值個性との對立することを發見し、實在的對象を、前者に關係せしめることにより、普遍化的文化科學概念を構成すると共に、之をば後者に關係せしめることにより、歴史的的文化科學概念を構成するのである。他の語を以て言ひ表はすならば、廣義における道徳價值、藝術價值等の世界のうちに、吾々は、狹義に於ける道徳價值、藝術價值等と、道徳史價值、藝術史價值等とを區別するのであり、前の種類の價值に關して、理論的考察に従事するものが、道徳哲學、藝術哲學等であるとすれば、後の種類の價值については、その理論的考察を任とする

1) 茲で歴史的價值といふ概念を考へるのは、價值の理論における歴史主義とは全く異なる見地に立脚するものである。——cf. Lask, Rechtsphilosophie, S.12-13, 邦譯, 20-21頁

學問として、道德的歴史哲學、藝術的歴史哲學等が成立すべきであること、考へられるのである。そして、或る人物又は或る事件が、單に政治價値とか、宗教價値とか、經濟價値とかの、いづれかの一つに關係せしめられて、その個性を考察され得るばかりでなく、二個又はそれ以上の價値に關係せしめられることにより、一層完全に、一層深く、その個性を考察されるやうに、或る對象の價値は、政治、宗教、經濟等の種別的價値觀點の、いづれか一つから、その個性を把握され得ると同時に、これらの觀點の二個又はそれ以上を綜合するところの見地から、一層完全に、一層深く、その個性を把握され得るのである。そして經驗的にあたへられた或る對象の個性的價値が、それに關して立てられ得る一切の價値觀點を、能ふ限り洩れなく綜合するところの見地から把握され得たとするならば、その對象の歴史的價値一般が認識されたものと、言ふべきであらう、かのヘーゲルの歴史哲學の如きは、斯かる意味における歴史的價値一般の體系的認識を、目標とするものではなからうか。

#### 十四

直觀の世界における無限に多様な異質的内容の發展の流れの裡から、任意に、この内容又はかの内容を、それぞれ一個の對象として指定した場合に、それらの若干の對象のいづれを取つて見ても、相互に別異なる個性的内容を、觀取し得ることは、明かであるけれども、斯かる意味にお

ける個性は、未だ以て個性の論理的意義に叶へるものとは、言ひ得ない。或る對象が、十分なる意味において、個性を有すると、みとめられた能ふためには、絶儔性と、不可分の統一性と、獨立性を、併せ具へなければならぬ。先づ或る對象は、その包容する諸要素が、統一的原理によつて内面的に綜合せられ、不可分の全體を構成するといふのでなければ、個性有りと言へることを得ない。しかも、斯かる内面的構造の儘に、或る對象が、絶對に孤立して存在するものと、思惟される場合には、己れみづからを、單に己れみづからとして、保持するのみであつて、己れみづからの個性を顯現しつゝ、己れみづからを保持するものと言ふことはできない。そのためには、他の諸對象との關係において、絶儔的たり、獨立的たるのでなければならぬ。絶儔性の前階段は、別異性である。或る對象が、他の對象とは別異なる内容を有すると認められるのは、すでに、これらの對象が、同一の意識の體系のうちに攝取されて、それぞれ別異なる規定をあたへられることを、意味するのであるが、進んで若干の對象が、各自の別異なる内容を具有しつゝ、それらの別異なる内容を統一的全體にまで綜合するところの、有機的關聯に参加するとき、各個の對象に固有なる内容の別異性は、一個の包括的、統一的なる全體内容の構成要素として、それに獨特なる意義を、すなはち絶儔性を獲得するのである。而して、その際、各個の對象は、それぞれ絶儔的なるが故に、相互の關係において他を支持しつゝ、協同して全體の關聯の成立を可能な

らしめるのであり、斯かる地位と能力とに基いて、全體との關係においても、侵す可からざる獨立性を保有するのである。かやうに、數多の對象が、互ひに相率ゐて、一個の連續的系列の裡に立ち入り、其の中にあつて、あらゆる對象が、他の如何なる他の對象を以てしても置き換へ得られないやうな獨自の地位を、占有することに因り、その個性を發揮する場合には、それらの對象を分肢とする系列其者は、それみづから全然個性的な統一的全體を提示するものと、言はねばならぬ。

或る價値が、十分なる意味において、その個性の故に、價値ありとされたるためには、ひとしく右に述べたやうな條件が、充されねばならぬ。純粹なる觀照的態度において意識される個々の價値は、各自それに特有なる内容の儘に、自らの個性の認識を待ちまうけてゐるのであるが、それらの價値の個性が定立されるのは、より包括的な内容を有する價値の體系の不可缺的構成分子として、それ等の價値が採擇されることに基くのである。しかもこの場合に、全體價値は、部分價値の個性的内容の總和を以てしては、盡くすことの出来ない個性的内容を有し、あだかも部分價値が、全體との關係において、獨立性を有すると同様に、全體價値は、部分價値の全者との關係において、獨自の意義を表明するのである。しかも全體價値の個性が、強烈であり、偉大であり、豊富であれば、それに壓迫されて、部分價値の個性は、微弱であり、卑小であり、貧疎で

あるといふやうなとは、全く反對な交互關係が、兩者の間に成り立つのである。而して、或る全體價值は、その部分價值を率ゐて、より包括的な全體價值の構成分子たる地位に立つことより、それ自身の個性及びその部分價值の個性を、確保されるといつたやうに、一の全體價值は更により包括的な全體價值に從屬するのであるが、各種の價值の世界において、終極の全體價值を成すべき所のものは、純粹價值の理念であつて、あらゆる顯在價值に比して、より豐富なる、より顯著なる個性を有するものと、言はねばならぬ。

普遍的價值の世界においては、上層に立つ價值は、下層に立つ其れに比して、より普遍的、より抽象的であり、從つてその内容の量においては、より貧しきものたることを免れぬに反して、個性的價值の世界においては、上層の價值は、下層のそれに比して、より個性的、より具體的であり、その内容の量も、より豊かであらねばならぬ。而して、前の世界において、上層の價值を、下層の價值との關係において、價值類型もしくは類型的價值と呼ぶこととするならば、後の世界における上層の價值は、下層の價值との關係において、價值典型もしくは典型的價值と呼ばれるべきであらう。かくて、道德、宗教、科學等のさまざまの文化の世界を地盤として、その上方に、類型的價值と典型的價值とは、全然別様なる論理的構造を具有する各自の世界を展開すべく、これ等の各個の價值の世界において、一切の類型的價值は一個の最高の類型的價值に頂宗し、一切



の典型的價値は、一個の最高の典型的價値に頂宗するであらう。更にまた、これらの最高級の典型的價値の若干個數は、一個の窮極の類型的價値、即ち普遍的價値一般の下に共屬し、同様に、最高級の典型的價値の若干個數は、一個の窮極の典型的價値、即ち個性的價値一般の下に共屬するものと、視られるであらう。

## 十五

價値の個性が、右に述べたやうに、價値それ自體に内在する具象的意味の方面から、問題とされる場合には、道德價値、學問價値、宗教價値、藝術價値、法律價値、經濟價値などの各種の世界の内面において、各自に特有なる幾多の價値典型に包攝せられる價値個性の體系が、觀取されるのである。例へば、價値類型としての宗教價値一般は、あらゆる種類のあらゆる宗教價値に共通なる若干の普遍的標徴の統一者を意味するにすぎないが、價値典型としての宗教價値一般は、あらゆる種類のあらゆる宗教價値の個性を産出して、なほ限り無き産出力を藏するものである。更に典型的宗教價値一般の内面には、佛教的、基督教、回教的等の名稱を以て呼びえられるところの、價値典型が、並び存立する。佛教といひ、基督教といひ、回教といひ、歴史的實在として觀られる場合には、時間的事實性の世界の因果的關聯の中に、その存在と發展とを託するものであるが、歴史的に宗教的實在を地盤として顯現する各種の宗教的價値典型は、實在の世界を超越

せる個性的價値の世界の統一的構成原理たる意義を有するものである。更に例へば、佛教的價値典型の領域の内面において、眞言宗的、禪宗的、日蓮宗的、眞宗的等の諸種の價値典型が、區別され、それらの價値典型は、それぞれ無數の價値個性を包容しつゝ、獨自の領域を展開するであらう。なほ他の方面に例證を求めるならば、繪畫の諸流派の表現する個性的價値の如きは、典型的繪畫價値一般の世界の内面において、獨自の領域を劃しつゝ相對峙するものである。若しも繪畫の諸流派の意味する所の價値が、價値類型として理會されるならば、すべて或る流派の傳統又は特徴に適合する繪畫は、何等かの繪畫價値を示す限りは、當然にその流派の繪畫價値を具有するものとして、銘を打たれるであらう。之に反して、繪畫の或る流派の精神とも呼ばれるべき所のものが顯現する典型的價値は、眞正なる意味においてその精神を體現する繪畫の價値内容に非ざれば、その體系の構成分子として、之を採擇しないであらう。

價値の個性は、更に別個の方面からも問題とされることが能きる。すなはち、私たちは、實在の世界を地盤として、自己の活動により、價値を實現する能力をさづけられた、唯一の主體たる、人格者との交渉の方面からも、價値の個性を考察することを得る、價値が、同一の個人の活動に基く所産として、思惟される限りにおいて、同一種類の價値の世界の内面における諸價値は他の個人の所産として思惟されるところの諸價値から、判然と識別されるやうな、個性的色彩を

示すものである。しかるに、同一の個人の活動が、異なる種類の價值の世界の成立に寄與するものと考へられる結果として、諸種の價值の世界に亘つて、その中から、或る個人の所産たる諸價值が、抽出され能ふわけである。而して、斯く抽出された諸種類の諸價值が、一個の人格價值の見本として視られる場合には、後者は、價值類型として、前者に對立するものであるが、それらの諸價值が、各自の價值種別に從つて整序せられつゝ、一個の人格價值の個性的絶對的内容を合成するものとして、認識される場合には、後者は、價值典型として、前者に臨むのである。或る特定の種類の價值個性の世界の内部において、或る個人の人格の所産たる各個の價值は、この價值典型としての人格價值との關係において初めて、其個性的意義を理會され能ふのであり、且つそれらの諸價值が、單に因果的意義において、或る個人の人格の所産たるに止まらず、内面的、必然的意義において、或る個人の人格の發展系列の一分肢として理會される事も、各個の典型的人格價值の思想によつてのみ、可能とされるのである。更に、幾種類かの價值の世界を通觀して、其處に、或る個人の人格の所産たる諸價值の存立を認識した場合に、各個の價值の世界において顯現された諸價值が、その存立の地盤の方面における共通性以上に、内面的必然的關係により、一個の人格の活動の成果として思惟され能ふのも、ひとしく典型的人格價值の思想に負ふのである。素より茲に謂はゆる典型的人格價值は、純粹なる妥當性において存立するものであつて、個

人の精神的及び肉體的機構のうちに與へられるものでもなければ、個人が現實に構成する何等かの思想的意識内容その者のうちに與へられるものでもない。各個の個人の人格價値の個性的内容は經驗的、事實的には、棺を蓋うて初めて定まるのであるけれど、論理的には、各個の個人の人格價値の典型的個性が、先づ確固たる存立を有し、それに基いて、彼の人格的活動の所産たる、一切の個性的價値が、その絶倫的内容を具有するのであると、思惟されなければならぬ。

更に、數多の個人の活動が、社會又は團體の活動にまで綜合され、統一されるときには、後者の人格價値及びその内容を構成する價値個性が思惟しえられる。すなはち或る社會又は團體の所産として認識される所の諸價値は、その社會又は團體の具有する典型的人格價値を表現する所の價値系列のうちに、その構成分肢として定置されることによつて、その個性的意義を把握され能ふのである。この場合に、價値普遍性の方面に着眼するならば、社會的又は團體的人格價値が價値類型として思惟されることも、個人的人格價値の場合と異なる所はない。唯個人の人格的活動が、社會又は團體の構成員としての活動と視られる場合においては、社會的又は團體的人格價値は、個人の人格價値に對し、價値典型たる地位を獲得するのである。すなはち、各個の個人の人格價値は、或る社會又は或る團體の人格價値の個性的内容の不可缺的構成要素として認識されることにより、初めてその個性的意義を、十分に規定されるのであつて、斯かる倚存關係が、一個

- 1) 私が茲に社會又は團體の人格價値を想定するのは、例へば Hegel や Bosanquet などにおいて視られるやうな、超個人主義的な形而上學的見地に立脚するものではない。

の種別的價值の世界の内部においてのみ成立すると、思惟される事も、勿論可能であるけれど、より多くの種類の價值の世界に亘り成立することの、認識されるに随つて、個人の人格價值の個性も、社會又は團體の其れも、一層鮮明に觀取され能ふであらう。同様の關係は、或る社會又は團體の個性的人格價值と、より包括的な社會又は團體の其れとの間においても、等しく成り立つわけである。而して、斯くの如く、相互に包容し、包容されつつ、價值の體系又は系列を形成する所の、無數の個性的人格價值が、悉く一個の窮極の個性的人格價值によつて包容され、その構成分子として、後者のうちに、各自の個性の最も深き根源を見出すといふやうに、構想された場合には、神と名づけるのが最もふさしいところの思想に、私たちは當面するであらう。そしてあらゆる人格價值の普遍妥當性の根據が、この窮極の價值によつて與へられると同時に、如何なる人格價值と雖も、この窮極の價值の偉大にして豊富なる個性を以て、その個性の至高の典型として仰望せぬものは無いであらう。

價值の類型と個性との問題について、なほ多くの考察さるべき論點の存することは、言ふまでもない。以上は、唯この問題につき、概觀を試みたといふに止まるのである。(完)